

## スポーツ指導者としてのコミュニケーション能力育成に向けた学習プログラムの開発と評価

### 一言語的・非言語的コミュニケーションの両側面からのアプローチ

#### (ポストコロナ時代に向けての検討) ー

幅田 彩加 (平成国際大学)

村田 芳子 (平成国際大学)

青木 智子 (平成国際大学)

水國 照充 (平成国際大学)

### 1. はじめに

#### 1-1. 研究の背景

近年、急速に進む情報化の波は、人間関係のありように大きな変化をもたらし、深刻な問題を次々と顕在化させている。教育現場では、子どもの暴力やいじめ、不登校などが形態を変えながら今もなお進行し続けている。スポーツの場面においては、アスリート間だけでなく、指導者による体罰やハラスメント等の指導者によるコミュニケーションが様々な問題を生じさせ、近年メディアで多く報じられている。これらの問題に共通する要因として、コミュニケーション能力の欠如や低下が指摘される。その内実を、筒井(2018)は、「送り手」の発信を起点とした言語コミュニケーション力の低下もさることながら、「受け手」の「受信・解読」を起点とした非言語コミュニケーション力の低下にあるのではないかと述べ、非言語コミュニケーションを念頭に置いた指導の必要性を指摘している。これらの根本的な解決には、構造改革や制度の見直し等の現実的な対応だけでなく、従来とは異なるアプローチとして「身体からのアプローチ」が必要であると考えられる。

しかし、このようなコミュニケーションの重要性が強調される中、昨年度末より世界中へと広がった新型コロナウイルス感染症(以降コロナと表記)によって生活様式は大きく変化し、人と接触する機会を減らすことやソーシャルディスタンスを保つことが求められ、コミュニケーション環境も大きく変化した。大学においても様々な規制がかかり、埼玉県にある本学においても、春学期の授業は対面で行うことが禁止され、オンラインでの授業を余儀なくされた。筆者が担当するコミュニケーション科目においては、今までの授業では他者との関わりや身体を通しての気づきを大切にしてきたが、コロナによって身体活動や身体的コミュニケーションの機会が大幅に奪われる状況となった。

そのような背景をもとに、ポストコロナ時代のスポーツ指導者としてのコミュニケーション能力育成について検討して行く必要がある。

#### 1-2. 研究の目的

平成29年度に新設された本学のスポーツ健康学部では「高いコミュニケーション能力を有した指導者の育成」をディプロマポリシーとして掲げ、カリキュラムを組んでいる。本研究は、スポーツにおけるコミュニケーション能力に注目し、本学で開講しているコミュニケーション科目を取り上げ、スポーツ指導者に必要なコミュニケーション能力向上プログラムの開発が目的である。その際、今年度はコロナによる生活様式や授業形態の変化を踏まえて検討して行く必要が出てきた。そこで、

コロナ禍によるコミュニケーションの変容を捉え、変容がコミュニケーション能力にどのような影響を及ぼしたのかを調査し明らかにしていく。そして、「ポストコロナ時代のスポーツ指導者としてのコミュニケーション能力育成に向けた学習プログラムの開発」を検討するための資料を収集することとする。

## 2. 研究方法

### 2-1. 調査方法

#### 2-1-1. 対象とした授業の概要

調査対象とした授業は、本学部必修のコミュニケーション関連科目「身体表現論」(2年生対象)である。この授業のテーマは、「多様に広がるダンスとスポーツを『身体表現』という大きなくくりから捉え、特に両者の共通項であり人間にとって基本的な『身体を通した人間間の相互交流(身体的コミュニケーション)』の視点からスポーツとダンスの持つ意義と両者の新たな関わりの可能性を探っていくこと」(授業ガイダンス資料より)としている。この視点については片岡(1991)が著書の中で、舞踊は「身体を媒体にした力動的時空間芸術」とみなされ、舞踊に近接する演劇と音楽の三者は、身体を用いて演ずるという共通性から、「上演芸術」としてくくられる。これと同じ意味で、「舞踊」と「スポーツ」は「身体表現」という中心概念のもとに一つにくくることができると述べている。つまり、非言語コミュニケーションへの視野を広げることを目的とした学習内容である。

全15回の授業の概要は表1の通りである。毎回の授業前半では、身体表現及びダンスを入り口に、様々な観点からダンスとスポーツの関わりについて講義を行い、授業の11回目から15回目は中間で提出させたレポート(講義を基に各自の関心のあるテーマを見つけまとめたレポート)から優秀レポートを選出し、選出されたレポートの作成者は、そのレポートをスライドにまとめ、プレゼン形式で全体への発表を行った。

表1 2020年度「身体表現論」の授業概要

授業回	授業内容
1	オリエンテーション:「身体表現論」の授業の内容と進め方について
2	スポーツとダンスにおける身体表現の様々な現象
3	スポーツとダンスの共通性と違い
4	身体表現とダンス、映像で見るいろいろなダンスとその特性
5	人はなぜ踊るのか?ダンスの発生と文化
6	ダンスを踊り学び指導する、教育としてのダンス
7	スポーツとダンスの共通性と違い①、テーマ探しについて
8	スポーツとダンスの共通性と違い②、提出するレポート作成の説明
9	スポーツとダンスの共通性と違い③
10~12	選ばれた優秀レポートの発表

## 2-2. 調査内容・対象者

3/13

### 2-2-1. 先行研究からの検討

2020年度におけるコロナ禍の影響を考察する為、先行研究として本研究代表者の幅田が行った2019年度の「身体表現論」での調査データの検討を再度行う。また、本調査対象授業以外のコミュニケーション関連科目は対面が伴う授業形態のため、コロナ禍でのプログラム実施は出来なかった為、過去の調査データからコミュニケーション能力育成プログラムの検討を試みることにする。

### 2-2-2. 授業前後のコミュニケーションに対する認識の変容

2020年度本学スポーツ健康学部において2年生対象に開講された「身体表現論」の受講生を対象に、授業の初回及び最終回の2回、コミュニケーションに関する自由記述回答形式の質問紙調査をGoogleフォームを用いて行なった。提出したのは初回128名、最終回113名。本研究では意識の変容を捉える為、初回と最終回の両方のデータが揃う111名を分析対象とした。

質問紙の中で今回分析対象としたのは、5項目内の1項目「あなたにとってコミュニケーションとはどのようなものですか？また、コミュニケーション能力の向上をどのように捉えていますか？」という設問の回答内容である。ここから、受講生のコミュニケーションに対する認識の傾向を明らかにすると共に、本授業の受講を通してコミュニケーションに対する認識がどのように変容したかを明らかにしていく。〔表2・3〕

### 2-2-3. 2019・2020年度の対応分析

上記の2020年度のデータと、同調査を実施した2019年春学期「身体表現論」の受講生53名のデータを使用し、対応分析を行う。そして、コロナ禍の経験が実際にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしていく。〔表4〕

### 2-2-4. コロナ禍におけるコミュニケーションに関する変容

コミュニケーション関連科目の受講生113名に、「コロナ禍でのオンライン授業や自粛生活によっ

表 3 初回調査のデータ概要

延べ回答件数(使用)	128(111)
文の数	567
総語数(使用)	13,231(5,109)
異なり語数	1,065(855)
出現回数の平均	5.98
出現回数の標準偏差	22.85

表 3 最終回調査のデータ概要

延べ回答件数(使用)	113(111)
文の数	484
総語数	12,721(4,930)
異なり語数	1,082(857)
出現回数の平均	5.75
出現回数の標準偏差	22.33

表 4 対応分析のデータ概要

延べ回答件数	166
文の数	620
総語数	16,843(6,559)
異なり語数	1,246(996)
出現回数の平均	6.59
出現回数の標準偏差	28.02

表 5 コロナ禍に関するデータ概要

延べ回答件数	113
文の数	541
総語数	17,095(6,948)
異なり語数	1,412(1,143)
出現回数の平均	6.08
出現回数の標準偏差	21.14

てコミュニケーションにどのような影響を及ぼしたと思いますか？新たに気付いた点など具体的に述べてください。」という質問調査を Google フォームを用いて行った。そこから、コロナの影響によって変化を及ぼしたコミュニケーション環境や能力の具体的な要素を明らかにしていく。〔表5〕

### 2-3. 倫理的配慮

学生には入学時にコミュニケーション能力基礎調査を行い、その前に一連のコミュニケーション関係の調査・アセスメントを受けることの同意を書面にて得ている。また、本調査を実施するには論文や報告書などで公表することがある旨を講義動画内で説明すると共に、回答フォームの最後に同意のチェック欄を設け、承諾を得られたデータのみ研究に用いている。あわせて、データは研究の目的以外には一切使用しない。

### 2-4. 分析方法

収集した自由記述回答のデータは、テキストマイニングの手法を用いて、使用されている単語を抽出し、使用頻度を明らかにしていく。テキストマイニングとは、アンケート調査における自由回答のような文書形式のデータを品詞単位の単語に分解し、頻度を数えたり統計手法などの様々な分析手法を駆使して、文書全体を理解するための方法である（牛澤，2018）。ソフトウェアはKH Coderを使用した。

抽出された語は、それぞれの関係性について共起ネットワークを用いて分析すると共に、まずは授業初回と最終回で比較を行い、受講生のコミュニケーションに対する認識の変容について考察を行う。

次に、コロナ禍での影響を明らかにするために2019年度と2020年度で対応分析を実施。加えて、先行研究との比較も行う。

最後に、コロナ禍でのコミュニケーションに関する質問調査の自由記述回答をテキストマイニングの手法を用いて分析し、多次元尺度法で具体的な要素を明らかにしていく。多次元尺度法とは、抽出語の間の共起関係を元に距離を計算し、その関係をできるだけ保持するように2次元または3次元の空間に配置する手法である（牛澤，2018）そして、より具体的な影響を見る為にKWIC コンコーダンス（キーワードを中心に前後に文脈を表示する手法）も用いる。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 先行研究からの検討

#### 3-1-1. 2019年度「身体表現論」の授業前後のコミュニケーションに対する認識の変容

本研究代表者の幅田は、2019年度本学スポーツ健康学部において開講された「身体表現論」の授業初回、及び最終回に実施したコミュニケーションに関する質問紙調査をテキストマイニングの手法を用いて分析し、受講生の授業前後のコミュニケーションに対する認識の傾向、及び変容を明らかにしている。

その結果、初回調査時の受講生は、コミュニケーションとは「会話」であり、「相手に話して伝えること」であると捉えていたが、本授業を通して、言語的コミュニケーションだけでなく、身体を通じた非言語的コミュニケーションがあることを認識したことが明らかとなった。このことは、身体でもコミュニケーションが行われることへの大きな気づきでもあり、本授業のテーマである「多様に広が



研究代表者の幅田らは、スポーツ実習「体づくり運動」においては2018年度に調査を実施。受講生100名に授業1回目から14回目まで毎時の授業前後に心身の状態に関するチェックリストの記入を行ってもらい、「体ほぐし」のどのような内容が受講生の心身と人間関係に影響を及ぼすかについて、SPSSを用いて分析を行った。その結果、授業1回目から14回目まで9割以上の項目で受講前よりも後の方が得点が有意に向上することが明らかとなり、他者と交流しながら行う形態を中心に構成された本授業のプログラムは、受講生の体と体と人間関係をほぐし、プラスに影響を及ぼすプログラムだったことが確認されている。

以上のように、対面が伴う授業形態のコミュニケーション関連科目は今年度はコロナ禍のため実施が出来なかったが、今までの調査から有効性は明らかとなっている。

### 3-2. 2020年度「身体表現論」の授業前後のコミュニケーションに対する認識の変容

#### 3-2-1. 初回・最終回調査における語彙の出現頻度と変容

本授業のテーマは、多様に広がるダンスとスポーツを『身体表現』という大きなくくりから捉え、『身体を通した人間間の相互交流(身体的コミュニケーション)』の視点から両者の持つ意義と新たな関わりの可能性を探っていくことである。このような視点で行われる授業に対して、受講生はどのような反応を見せるのか。授業初回と最終回で調査を行った。そこから抽出した語彙の出現回数を頻度順で図2(初回調査)と図3(最終回調査)に示した。両データ共に出現回数を10回以上で設定して図を作成した。処理は規定値で行った。

初回・最終回の両データ共に、出現頻度の上位には、設問文章に含まれている語の「コミュニケーション」「能力」「向上」、また一般的な語の「人」「思う」「相手」「自分」などが並ぶ。設問文章に含まれている語と一般的な語以外で、頻出度に変容のあった単語に着目してデータを見てみると、「表現」「理解」「知る」「気持ち」などに多少の順位の変動が見られた。しかし、2019年度のような大きな変容を見ることはできなかった。

2019年度は、「伝える」の語が初回7回から最終回21回へと頻出回数が3倍に上昇しており、加えて「伝える」の語が「話す」の語よりも頻出が増えているという変容があった。「話す」というのは、「自分の言いたいことを言う」という自分主体の感覚であり、「伝える」になると「相手に分かりやすく言う」という相手主体に変化する。ここから、コミュニケーションというものが、自分から発することで終わるのではなく、自分の発信が相手に受け取られるイメージにまで広がった様子を読み取れた。また、初回には一切出現していなかった「身体」という単語が最終回には頻出していた。ここから、言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションがあることを認識したことが考察され、ここに身体でもコミュニケーションが行われることへの大きな気づきを見ることができた。

2020年度は、「伝える」の語は初回から頻出語の上位(71回)に上がっており、「身体」も初回から出現している。この理由として、今年度は授業初回以前にコロナによる自粛期間があり、身体を通した直接的コミュニケーション機会の減少、そしてオンライン上でのやり取りが影響しているのではないかと推察する。また、2019年度初回には見られなかった「生きる」という語が2020年度には授業初回・最終回共に上位に出現しており、「生きる」上でのコミュニケーションの重要性を強く実感している様子が見て取れた。



初回と最終回、どちらの共起ネットワークを見ると、どちらにおいても2つの回答傾向が読み取れる。一つは、コミュニケーションは人間関係を築く上でも社会生活においても「生きる為に必要だと考える」という認識。もう一つは、具体的なコミュニケーション方法や伝達手段・内容に関する認識傾向である。

初回から最終回への変容として見られる点は、「表情」などの非言語コミュニケーションに関する抽出語や、「感情」という目に見えないもののやり取りが、「伝える」を含むカテゴリと同じになっており、言語以外の伝達方法や表現への理解が深まったように思われる。これは「意思」「疎通」にも同じことが言える。以上の点を含め、初回よりも最終回調査時の方が認識の整理が少しされたような印象はある。しかし、抽出語の出現頻度の結果同様に、2019年度と比較するとその変容は大きいものとは言えない。2019年度最終回調査の共起ネットワーク〔図1〕には「スポーツ」という単語が現れ、「ダンス」と結び付いている。これは授業の狙いの部分であるが、2020年度にはこの共起関係は最終回に現れなかった。原因として、オンライン授業では双方向でのやり取りの機会が作りにくいことから、受講生が授業内容を自分自身のスポーツや経験などに結びつけていく思考時間や言葉かけが昨年度よりも減少していたことが考えられる。

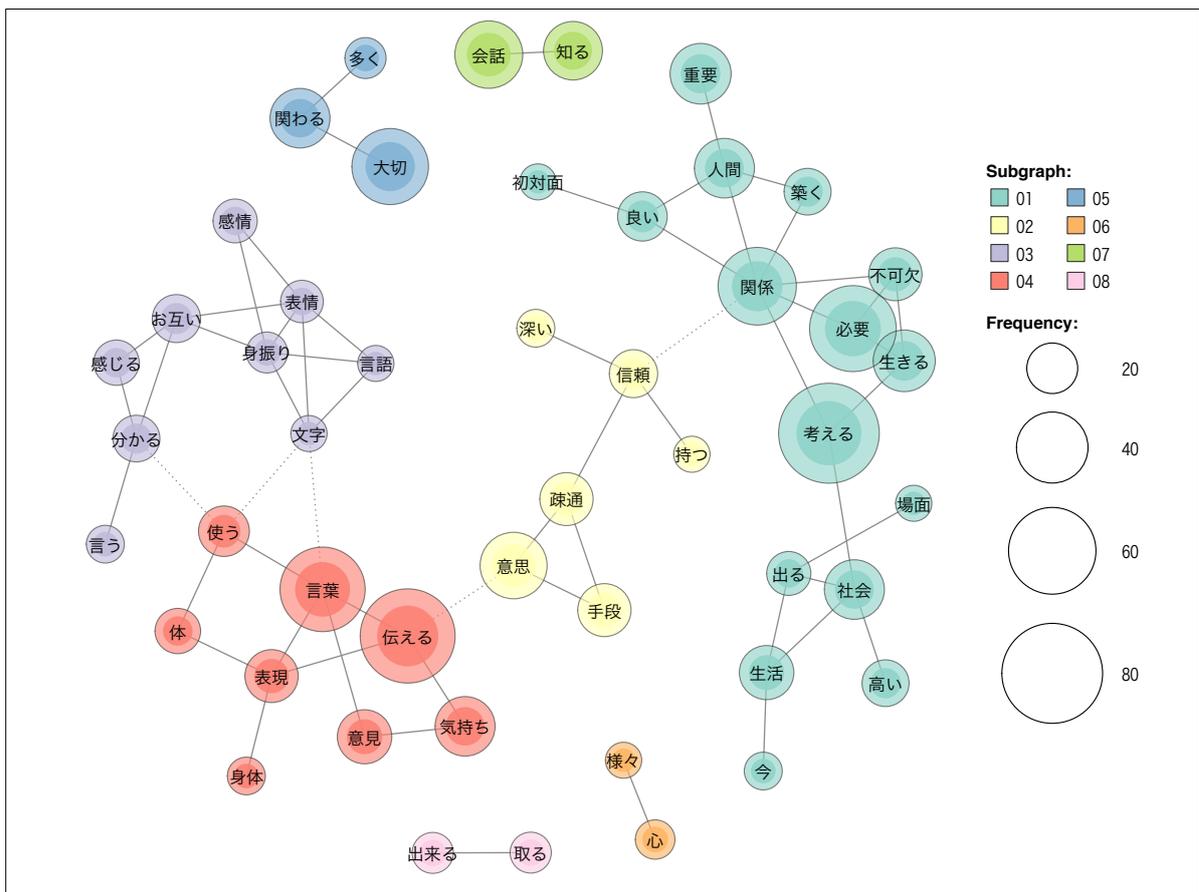


図 4 初回調査における抽出語の共起関係



は大きく違いはないことから、授業形態の違いが影響していることが考えられるだろう。また、「心」や「気持ち」、「信頼」などの、目に見えないものへの意識や想像力が育まれた様子も特徴として読み取れる。

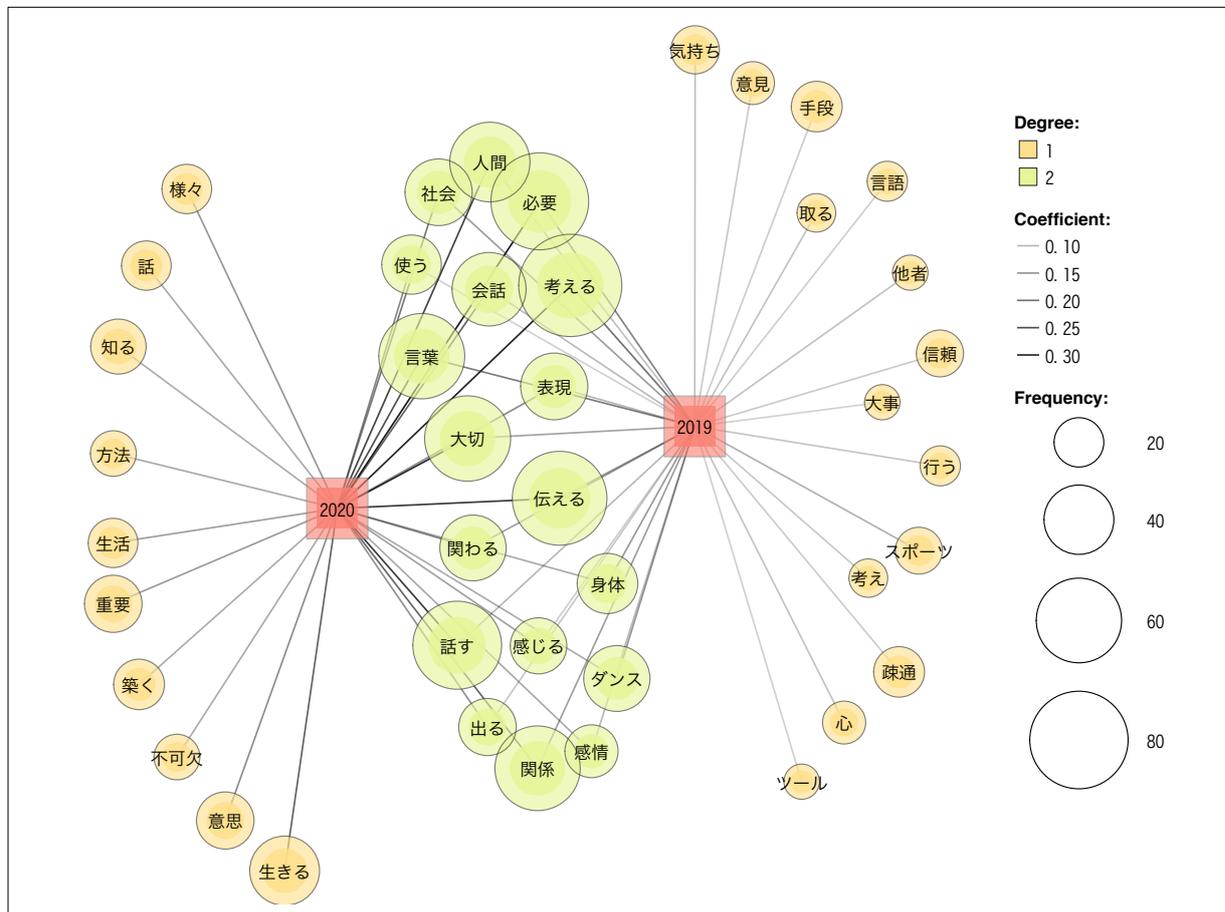


図6 2019・2020年度の対応分析（最終回調査データ）

### 3-4. コロナ禍におけるコミュニケーションに関する影響

2020年度はコロナによって生活様式も授業形態も大きく変化した。それらがコミュニケーション環境や能力にどのような影響を及ぼしたのか、対象学生に質問紙調査を行った。そして、具体的な要素を明らかにするために、データから抽出された語を多次元尺度法によってグループ化を行った。その際、一般的な語と出現数の少ない語を除外し、推奨単語数に近づける為に出現最小数は10、最大数は150として分析を実行した。

分析の結果は〔図7〕の通りである。色分けされたグループ毎に番号を図上に追記し、以下に布置された単語とクラスター化による色分けの解釈を記述する。

①コロナによるコミュニケーション機会の減少や変化 ②生活環境の変化によるコミュニケーション能力の低下 ③当たり前だった日常への気づきと渴望 ④慣れないネット環境へのストレス ⑤コミュニケーションの重要性の認識 ⑥新しいコミュニケーション方法の開拓 ⑦感情表現の難しさと言語表現以外への興味・工夫 ⑧他者の存在に対する再認識

以上8つの要素を多次元尺度法の結果図から抽出することが出来、コロナ禍におけるコミュニケー



にも増して嬉しさがこみ上げてくる」など、コロナが今までの日常を奪ったことにより、再認識出来た点も多かったと言えるだろう。「スポーツを通して沢山の人達とコミュニケーションをとっていたことに気づいた」というように、スポーツにおける身体的コミュニケーションへの気づきも見られた。また、「コロナ禍であまり変化を感じなかった自分は、今までのコミュニケーションが言葉ばかりで行っていたということであり、もっと動作や表情を見て身体表現を感じ取るようにしっかり相手を見なくてはいけないと思った。」というような、逆説的な気づきもあった。

以上の内容から、コロナ禍でのオンライン授業や、様々な制限のある対面授業では、身体的コミュニケーションや身体活動の機会は明らかに減少した。しかし、失われたからこそ、それらの重要性を再認識していることが明らかとなった。

#### 4. まとめ

今回、本学で開講されているコミュニケーション科目において、授業前後のコミュニケーションに関する意識の変容を調査すると共に、昨年度のデータとの比較を行い、コロナ禍の影響について考察してきた。

2020年度の授業前後のコミュニケーションに対する認識の調査においては、抽出語の頻出度、また共起関係において2019年度と比較すると大きな変容を見ることはできなかった。理由としては、コロナ禍による自粛期間やオンラインツールでのやり取りなどの経験から、多くの受講生が授業開始以前からコミュニケーションに関して様々なことを感じ、学びを得ていたことが考えられるだろう。

コロナによってコミュニケーション環境は変化し、特に直接的コミュニケーションの機会は大きく奪われた。そのことにより、多くの学生がコミュニケーション能力の低下を感じており、コミュニケーションに関する弊害やストレスが生まれていることも分かった。だが、2020年度の受講生達は明らかに「生きる」上でのコミュニケーションの重要性を昨年度の受講生達よりも実感していた。表情や身振りなどの言葉以外の表現方法を自発的に工夫している様子も見られ、非言語コミュニケーションへの興味や意識が例年より向けられていたと思われる。また、コミュニケーション手段や場面の幅が広がっていた。つまり、コロナ禍の環境に陥って直接的なコミュニケーションに制限がかかり、身体を通したコミュニケーションの機会が失われたからこそ、それらの重要性を再認識したと言える。

今回の調査で、コロナによってコミュニケーションへの認識の変容が行ったことが把握できた。しかし、根本の問題設定としてスポーツ指導におけるコミュニケーション能力の育成に焦点を当てた場合、ポストコロナ時代の身体へのアプローチを考えていく必要がある。コロナが広がる前までは、身体的接触を伴う学習プログラムでアプローチを試みてきていたが、コロナが収束を未だ見せない中でプログラムを考えていかななくてはならない。

コミュニケーション能力の低下によって引き起こされる体罰やハラスメントなどの問題に対峙する上でも、体育やスポーツの指導者が、身体を通したコミュニケーションへの視座を深め、身体を置き去りにしないことが現代において大変重要である。

今回のコロナが起こした認識の変容の結果を得て、このきっかけを大切にしながら、ポストコロナのコミュニケーション能力育成をどのように提案していくか、研究を継続する予定である。

## 謝辞

本研究は、財団法人ミズノスポーツ振興会助成研究の助成を受けて行われました。財団法人ミズノスポーツ振興会に厚くお礼申し上げます。また、本調査にご協力頂いた皆様方に感謝の意を表します。

## 引用参考文献

- 青木智子, 水國照充, 村田芳子, 幅田彩加, 松永敏, 森嶋修 (2020) コミュニケーション能力とその向上に関する質的研究—学生のイメージするコミュニケーション能力とその獲得について—, 平成国際大学論集, 24
- 牛澤賢二 (2018) やってみよう テキストマイニング 自由回答アンケートの分析に挑戦!. 朝倉書店
- 片岡康子他 (1991) 舞踊学講義. 大修館書店
- 筒井茂喜 (2018) 非言語コミュニケーションの教育としての体育の可能性 —非言語メッセージの受信・解読に着目して—. 体育科教育学研究, 34 (2), 27-41.
- 幅田彩加・村田芳子 (2018) 「体ほぐしの運動」が受講生の心身と人間関係に及ぼす影響：授業前後の変化に関する自己評価から, 平成国際大学スポーツ科学研究所所法, 12, 10-17
- 幅田彩加・村田芳子 (2019) 「身体表現論」の授業に対する受講生の自由記述回答の内容分析—スポーツとダンスの特性と結びつき—, 平成国際大学スポーツ科学研究所所法, 13, 13-21
- 幅田彩加・村田芳子(2020) 「身体表現論」の授業前後における受講生の自由記述回答の内容分析—コミュニケーションに対する認識の変容—平成国際大学スポーツ科学研究所所法, 14, 1-9
- 樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して.ナカニシヤ出版
- 松尾太加志(1999)コミュニケーションの心理学 認知心理学・社会心理学・認知工学からのアプローチ. ナカニシヤ出版
- 村田芳子・三浦雅士 (2002) 「体ほぐし」が拓く世界 子どもの心と体が変わるとき. 光文書院
- 村田芳子・幅田彩加 (2018) 新学部におけるダンス関連科目（「身体表現論」・「ダンス」）への取り組み—コミュニケーション能力に着目して—. 全国教育大学協会・第36回全国創作舞踊研究発表会（埼玉大会）口頭発表